

# 研究委員会 中間報告



第157号

発行所 上高井教育会  
発行人 上高井教育会長 小林 謙三  
編集人 会報編集委員長 黒岩 幹夫  
印刷所 須坂新聞社

「子どもにとって、わかり、魅力ある授業のあり方」というテーマのもと、四月以来、各研究委員会ではさまざまな教育研究がなされてきました。各委員会では、現在どのような課題をもち、成果が得られてきているのか、後半に向けて中間報告していただきます。

## 子どもが主体的に 生きられる授業を

研究副委員長 北島 秀樹

本年度は「子どもにとって、わかり、魅力のある授業のあり方」というテーマを掲げ、中心講師谷川彰英先生からご指導をうけて二年目になる。四月二十日の研究総委員会では「関心・意欲を育てる授業づくり」と題して、「児童生徒がどんな分野にひっかかりの心(意欲)を持ち、それをどう学習の場として構成するか」「教えるとは子どもが自主的に意欲を持って取り組む、そこで、子どもの持っているものを動かすことだ」等の授業改善の視点を示された。それに従って、各委員会で教科等の特性を踏まえ、児童生徒の意欲を育て、わかる授業の実践に邁進されている。十一月二十四日(水)に第二回目の研究日を迎えるに当たり、第一回研究会理科の授業での谷川先生のご指導の幾つかを取り上げ指針としたい。○「教えるべき内容と日常生活との往復活動が必要」児童生徒の生活態度の吟味に立つ教材化と生活に生きる知識。○「選択肢をいくつか与え、根拠を持つての予想」問題解決学習における一人ひとりの

考えと予想の重要性。○「意欲を持って取り組むには学習の後が大事」学習したこと整理と後づけの必要性。○「グループの中で意見交換が少なくメリットがない」話し合いの中で考えが深まる。○「新しい学力視は子どもの自立の育成。そのために教師の出がある」学ぶことの価値意識や見通しを持たせる教師。知的好奇心に満ちた学習の中で、子どもが主体的に生きられる授業を創造したい。(須坂小)

### 《提言》

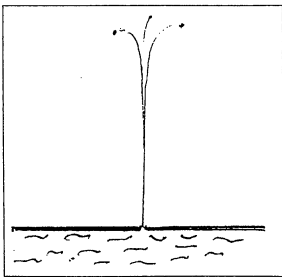
## 私の噴水授業論

—適度の抵抗と見通しを—

富澤 慶吉

左の噴水図(1)は、適度な水圧によって噴水口から出た水が無数の水粒となって四方へ飛び散り、美しい形を作っている。それに対して、図(2)は噴水口の間口が広すぎて、どぼどぼした水のままであり、図(3)では間口が狭く、抵抗がありすぎて一条の水が高く上がっているにすぎない。

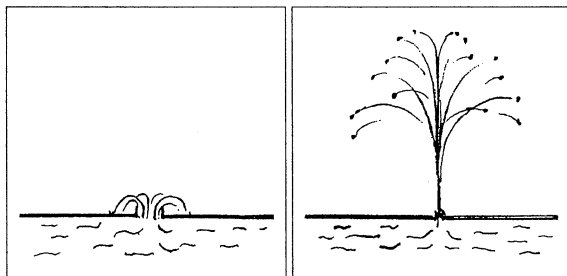
一定量の水を輝く水粒として四方へ飛ばせるためには、噴水口の間口を狭めて適度な抵抗を設定することが必要だ。この噴水の原理を授業にあてはめて見れば次のように考えられるはしないだろうか。子どもたちは「わかって、



図(3)

抵抗を乗り越えようと意欲を出すにちがいない。教師の側から見れば、本時でつけた力を明確に決め出し、全員にこの点だけはおさえたいこうとする手だてを準備して、一人ひとりの追究の姿を見通していれば、子どもは自ら動き出すにちがいない。こういう授業では、子どもにとってわかり、確かな力が身につくについて、一人ひとりが多様な考え方をだしながら、充実感の持てる学習が展開されるはずである。

間口が広すぎても、狭すぎても、わかり魅力ある授業にはならないであろう。(墨坂中)



図(2)

図(1)

### 上高井教育会だより

- 9・28 上高井教育会報第156号発行
- 9・28 上高井教育研究集会 於相森中学校
- 10・6 第6回常任委員会
- 10・18 教育課程研究協議会
- 10・21 上高井郡市PTA研究集会
- 10・24 第7回代議員会、信教各種研究調査編集委員中間報告(2)
- 10・26 上高井教育会報157号発行
- 11・2 全県研究大会 於中野市南宮中学校 本会参加61名
- 11・5 秋の講演会 於須坂市公民館
- 11・24 演題 「宇宙開発とその有効利用」
- 11・27 講師 科学技術庁航空宇宙研究所 宇宙研究グループ主任研究官 中島 厚先生
- 12・24 第2回研究委員会(午後)
- 12・27 第15回郡研究発表会 於須坂小視聴覚室
- 12・27 第14回郡女教師研究大会 於須坂小視聴覚室
- 12・25 上高井教育会報第158号発行—第15回郡研究発表会・第14回郡女教師研究大会特集—

### 《今後の予定》

# 社会科

## 市川 治利

「子どもがねばり強く追究したくなる課題をもち、その子なりの見方・考え方を深めるための指導のあり方」をテーマに、子どもの心情に合った素材の教材化をとおして、サブテーマに二回の実証授業を通して研究を深めようとしてすすめてきている。

本年度の研究課題をして①「追究したくなる課題」のめたせ方、②「その子なりの見方・考え方」のとらえについての二点に絞ってすすめた。

第一回研究委員会は、七月七日須坂小学校で実施した。三年、単元「わたしたちの市のように」授業者依田正良先生、本時の主眼は「日滝小学校の周りの観察をして、分かったことを発表しあう子ども達、観察してきたことを地図で確認しながら、友達の見聞を聞いたり、須坂小学校の周りの様子のもとと比較したりし、さらにOHPやビデオを見ることを通して、日滝小学校の周り、須坂小学校の周りの土地の使われ方の違いに気づく」であった。

話し合いでは、思ったより家・畑(りんご・ぶどう)が多かったことや、通った道にはほとんど店がなかったことなどを観察してきたことをもとに絵地図で確認しながら話し合うことを通して日滝小学校の周り、須坂小学校の周りの土地の使われ方の違いに気づいた。

また、OHPで日滝の地図に土地利用の様子を重ねて見せたことは、見方・考え方を深める場面となった。

講師の長野教育事務所指導主事、鳥海真幸先生からは、課題の持たせ方、見方・考え方の深め方、地図学習の段階的な指導等について具体的にのご指導をいただいた。

第二回の研究委員会は常盤中学校で授業研究を行い、テーマに一步でも近づこうという研究を深めていきたい。

(高山小)

# 高める授業を 会中間報告

## 本校の宝 ③

### 小山小学校の宝

小山小学校の宝は二幅の額とトチの木です。

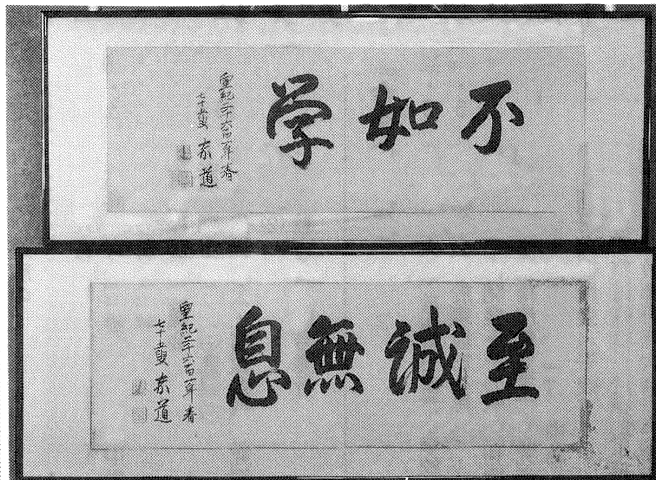
本校の前身は明治六年「大学の道は明德を明らかにするに在り、民を親するにあり、至善に至るに在り」という儒教の思想を持って創立された「止善学校」ですが、創立以来一貫してこの止善精神を教育心として継続し、現在においても「人格円満にして情操豊かな人間形成のよりどころ」としています。

児童昇降口の正面に「学如不(まなぶにしかず)」「息無誠至(しせいせむことなし)」の二幅が掲額されています。これは止善精神を受け

継ぐ校訓として、昭和十六年に須坂小学校小山部校から独立して小山国民学校としての出発にあたり、当時の城本重男校長が「学如不」「勞厭不」「息無誠至」「心一協和」の四項を校訓として挙げ、原嘉道氏(小山小学校の前身、止善学校の卒業生、苦学で東京大学を出られ、司法大臣、枢密院議長を歴任)にその揮毫を依頼したうちの二幅である。

また、今もなお昔ながらに変わらないのは、校庭のすみこにももりと茂りを見せているトチの木です。春には美しい白い花を咲か

せ、秋にその実がなり、すでに百年以上大地にがっちりとして根を張って大きく伸びていき、多くの卒業生とすぐれた人材を輩出してきました。小山小学校は、トチの木以上に大きく伸びようと「学如不」「息無誠至」の精神を心の寄りどころとして、登校下校の際には、この額を仰ぎ「情豊かな実践力のある子ども」の本校教育目標に近づこうと児童、職員共々に努力しています。(佐藤昭二)



## 算数数学研究委員会

### 渡辺 宣裕

今年度の算数数学研究委員会のテーマは、昨年度に引き続き「子どもが自ら数理を追究し、わかり、喜びのもてる授業はどのようにしたらよいか」、サブテーマには「論理的な思考力と直観力の育成を願いながら」を設定した。

本年度第一回の実証授業は高山小学校三年二組の今清水康恵先生に実施していただいたので報告します。

単元名「何倍でしょう」で三要素二段階の乗法適用の場面を設定した。

①突然OHPスクリーンを下ろすとそこには、問題を書いた模造紙がはってあった。児童は「なんだ」とびっくりし、自然に問題を読み出した。事象への直面が衝撃的であり、それだけ全員が集中できた。

②問題把握の段階

要素の関係を児童といっしょに作っていった図を完成させた。問題をはっきりつかませるには、有効な手立てである。

③個人追究の段階  
つまづきのチェックと個々に応じたヒントカードを配布するタイミングに注意が必要である。

④全体追究の段階  
多様な考えが出されたが本時の段階では、どれかの考えに集約することはしなかった。

⑤一般化の段階  
この段階では前の問題と同じように図を書くのではなく、図の簡略化などが必要である。全体追究での友達を考えを取り入れ(倍×倍)の考えを取り入れた児童がいたことは成果である。

児童の考えを位置づけてやることができた。(磁石付き名札カードの活用)  
この段階では前の問題と同じように図を書くのではなく、図の簡略化などが必要である。全体追究での友達を考えを取り入れ(倍×倍)の考えを取り入れた児童がいたことは成果である。第二回の研究授業は相森中学校一年生の図形についての実証学習を予定している。今回の授業をうけて授業改善をし、テーマにせまってきたと思っています。(常盤中)

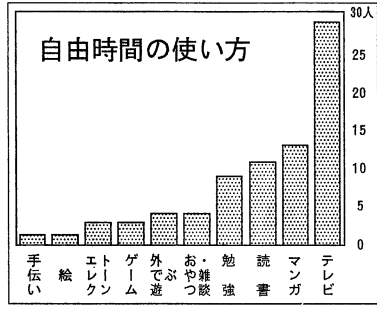
# 意欲・関心を 研究委員

## 技術・家庭科 研究委員会

湯田 博

「子どもにとってわかり、魅力ある授業のあり方は、どうあったらよいか」―「家庭生活」領域におけるつきたい力の見きわめと教材化―というテーマで、本年度の第一回研究日がもたれました。

実証授業校の旭ヶ丘小学校では、地域の特性や児童たちの家庭における生活状況に内色されている課題を踏まえ、より良い家庭生活が送れるために、自分たちの家庭生活を見つめ直すことを通して、家族に思いをよせた実践力を身につけたいと考えた。そして、学校教育目標の「精一杯自分の花を咲かせよう」を受け、心にしみこむ授業・基礎学力の確実な定着のため、教育課程改善の三視点を踏まえなが



ら、わかる授業・わかるまで教える授業・忘れさせない授業・学習意欲を育てる授業を心がけ、基礎的・基本的な内容(基礎学力)の確実な定着を図ることを教科指導の重点に掲げてきた。

子どもが生き生きと、自ら精一杯学習を進めるようになるためには、子どもの心情に則した価値ある教材が、豊かな学習活動となって展開されなくてはならない。したがって、教材の選択には十分に留意し、魅力のある授業にすることが教科のねらいにせまることであると考へ、研究が実践されてきた。本時を仕組むための研究の仮説も指導の実態のとらえにたち、①今までの家庭生活を振り返り、家族の人たちがどんな意識をもって生活し何をしてきたか、また自分はどうかを見返してみることを通して、家庭のはたらきを考えさせ、②自分の家庭での生活時間帯や家族の生活時間帯を調べてみることを通して、家族団らんの時間を

第一回の同和教育研究委員会は、相森中学校をお借りして行われました。授業は二年生でしたが、二年生は、この四月に組替えをしたばかりでお互い馴れ合っていない面もあって、自分をできるだけ表に出さず目立たないように、周りに合わせている様子が見られる。そのために差別があっても見て見ぬふりをして何もしなかったり、何をしても

## 同和教育研究委員会

綿田 虎男

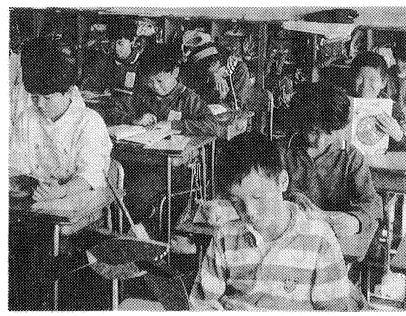
だめ、ほっておけばなくなるなど差別をなくすためには、消極的になりがちである。こういう学級の実態をふまえて、「青い目茶色い目」のビデオを視聴することを通して、差別される側の心の痛みがわかり、差別の解消に向かって明るい展望をもって努力しようとする心情を育てる」という主眼で授業が展開されました。

研究会では、「ビデオの内容や扱いについて」「主眼について」「明るい展望を持つことについて」「部落差別の問題にどうつなげていくか」などについて生徒の授業中の反

「あしたの国語の授業が楽しみだなあ。」と子供たちが思えるような国語学習を願って「学ぶ喜びのもてる国語学習のあり方―文学作品の授業を中心にして―」を研究テーマにし、二年目になりました。今年、第一回目の授業研究は、小山小学校五年生、宮崎泰弘先生の学級で行いました。教材文は「麦畑」。自然のすばらしさを見事に描写した文章、心触れ合う動物たち、生きる喜びを伝える麦畑の情景、月光に酔う動物たちの心

情を味わいながら朗読することが、単元のねらいです。小山小では、子供たちが、自然の情景を豊かに想像できるように、劇化や、効果音、BGMを入れたり、本文を歌にしたりしながら、音読を工夫して読み深めていく展開を試みました。

このビデオは、昭和六十三年にNHKのテレビで放送されたもので、担任の先生がダビングをし、それ以来ずっとあなたため、ほれ抜いて来た資料ということですが、そういうこともあって授業は、落ち着いた霧囲気の中で進められ、生徒も真剣に取り組み、本気に考えました。



## 朗読を楽しむ一つの試み

斉藤 章子

ともすればパターン化しがちな国語の授業に、このような学習活動を取り入れたことで、子供たちは意欲的に学習にとりくむことができました。しかし、歌づくりをしてい

講師の牧島先生からは、グ

最後、講師の先生から「子どもたちが自分の問題を持ち、それを取り上げられるようになる。それが同和教育である。そういう意味で今日の授業はそのきっかけをつかんだといえる。今日の授業を大事にして、もう二時間位かけて学習してもいい。そこで本音を出し合って語り合うことによつて、もう一つの殻を破り、子どもたちの心が通じ合うようになるもではないか。」とまとめていただきました。

若い宮崎先生が、学級の子供たちと本気になって国語学習にとりくんだ実践から、学ぶことが多くありました。(豊洲小)

た一つのグループでは、麦畑の美しい光景を表現したいという願いはあるのですが、文章とメロディーがうまく合わず大変苦労していました。教師の適切な援助がほしい場面でした。

終末の発表の時に、子供たちが「うますぎと言ったことがない。」と感想をのべたのは、音や曲を効果的に入れながらも、本文は言葉に気持ちこめて読み方を工夫して表現していたグループの発表でした。朗読の学習では、文章の読み方が何よりも大事なことを学んだのではないのでしょうか。

# 火ばら 談義



## この頃の事

武居 和紀

九月十九日、秋の大運動会が、青空のもと行われた。今年、私は新卒三年目を迎えた。夏休みが明けると、学校は運動会に向けていっせいに動き出す。気になるのは運動会の係だ。今年、いったい自分はどの係を任されるのだろうか。体育主任の先生から運動会のプリントが配布された。応援係である。応援係。須坂市内の小学校にはない係のようだ。この高山小学校では、毎年、会場係や準備係などと同じように、この係が位置付けられ、運動会近くになると、応援団が結成される。新卒一年目から、三年連続この係をやることになった。今年は一と味違う応援をしよう。構想は次から次へ、しかし、いかんせん時間がないのだ。もろもろの事情から、応援団を結成できたのは九月六日のことだった。運動会まで実質十日、昨年以上の応援ができるだろうか。

ところが、集まった子ども達やる気満々、私以上のアイデアを出してくる。不安はふっとんだ。運動会の種目の中に、応援合戦がある。そこでは例年、赤白に分かれ、三・三・七拍子や、フレー・フレーといった応援をしてきた。今年もそのつもりでいた。すると子ども達から「赤は赤の白は白の応援歌を作って応援合戦をしたい。」という声があがった。さっそく子ども達で応援歌を作り、練習を始めました。

全校一斉での練習は、他の全校種目の練習でなかなかできない。給食準備の時間を使って団員だけ集まり、応援歌を覚え、練習。放課後は各クラスの団員を中心に応援練習。朝の時間は低学年棟で集まってくる。一・二年生の児童と一緒に応援歌の練習をした。応援練習に力が入るあまり、太鼓が破れるといったハプニングもあった。気が付くと、私も大きな声をはりあげ一緒に練習をしていた。やる気になった時の子ども達のすごさを実感した。また、一緒に活動できたことをとても嬉しく思う。

運動会当日、子ども達の元気な応援が高山村に響いた。(高山小)

## 紫雲寺町に学ぶ

樋口 邦夫

今年の夏休みは初日から、須坂市と姉妹縁組を結んでいる「紫雲寺町・米子小学校」を親善訪問する機会が与えられ、市内の全小学校代表児童四十四名(各校男女各二名)とともに、どうにか初期の目的を果たすことができ、またそれ以上に素晴らしい感動も得させてもらえました。

言うまでもなく、須坂市と新潟県北蒲原郡紫雲寺町との縁は、今でも「紫雲寺湯干拓の祖」として崇められている。当市米子地区(旧米子村)出身の竹前兄弟の壮大な努力の賜にほかなりません。それだけに、紫雲寺町民の干拓事業に寄せる思いは先祖代々受け継がれ、その開拓者精神は脈々として町全体に溢れているように感じられました。われわれ須坂市民を迎え入れる心

遣いにも、そうした町民の皆さんの感謝の気持ちに、強く温かく伝わってきました。町役場への表敬訪問から始まって、米子小学校での歓迎交歓会、竹前家の墓地見学、はまなすの丘から眺めた日本海の夕日、新潟少年自然の家での肝試し大会、更に翌日の藤塚浜での地引き網の鱈の大漁と海水浴、そして最後のお別れ昼食会まで、すべての町の方や学校関係者の皆さんの心温まるおもてなしに、甘えっぱなしの二日間でした。でもこの貴重な「親善訪問」を終えて改めて感じたことは、現在のわれわれの生活の中に欠けている何かを、「人柄と土地柄の良さを磨く紫雲寺町民」の皆さんから、言葉ではなく心で教えていただいたように思いました。(旭ヶ丘小)

## 東祭を終えて

返町 輝雄

九月二十五日(二十六日と文化祭(東祭)が生徒会の企画推進として全校の盛り上げで成功裡に終えた。

日ごろ、中学校では生徒指導の上で何かと担任をてこずらせて、指導の難しさを覚える時がよくある。この期における体と精神のアンバランスによる一つの表われかも知れ

ない。そんな中学生でもフィリングが合えば何か大きな事が出来るんだと言うことを思い知らされた。

第二日目、吹奏楽部の演奏。体育館せましとブラスの響きがこだました。途中何曲かの演奏も終わってから、何か中学生にびった

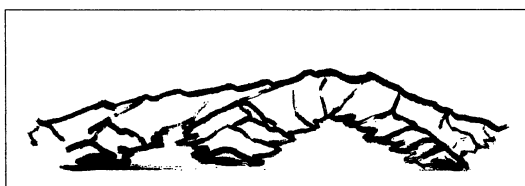
## 須高の山と川②

りの曲目となるや、どこからともなく拍手がわき上がってくるではないか。そして最後には全校一つになって、割れんばかりの拍手となり、アンコールを求めた聴き手、それに応じて演奏する部員で素晴らしい発表会をしめくくることが出来た。吹奏楽部長の「これがわたしたち、三年生最後の演奏です。アンコールまで聴いてくださり本当にありがとうございました。」

りがとうございました。」と感極まって涙するのが印象的であった。

日頃、指導の難しさを覚えていた中学生に、東祭において内なるエネルギーを改めて見ることが出来、私自身胸を熱くする二日間となった。

東祭ブラスの響き  
こだますマーチ終わりにて  
拍手なりやまず(東中)



## ふるさとの山 妙徳山 青木 廣安

山頂近く明徳沢に白髭明神を祀る明徳社がある。雨乞いの農業神である。古くは駒ヶ岳とも呼ばれ牧場神をうかがわせる。

妙徳山系の西端は山新田峠、東は仁礼の瀬脇から保科へぬける高岡峠まで。鞍部は長野盆地形成期の構造線が通ると推定され、山体が傾動している。川中島合戦の謙信道などの軍道につかわれてきた古道である。

妙徳山はふるさとの山である。地元高甫地区ばかりでなく須坂市民からも、はっちよやま、と呼ばれ親しまれ、山の原風景の一つになっている。標高は一二九三・五だが須坂市の南端の空を限るスカイ・ラインを描き、山麓からの比高が約九〇〇で聳立性

鮎川に面して、前山・蛇塚戸谷など崖錐地形が開け、かつて上部まで耕地化された。"ししよけ"と呼ばれる石積遺構もある。久保山・笹が崎などの山稜の末端は三角面をなし、鮎川に沿う断層崖とみられる。これらの屋根筋に鷹羽城など山城跡が並ぶ。中世鎌倉道の押えの砦であった。